

## 第二十五回學術大会發表要旨

### T・ネーゲルによる反物理主義の議論とその意義

筑波大学大学院 榛松 雪彦

本発表では、心身問題における反物理主義的立場を擁護する議論の可能性について考察した。心身問題の議論は長い歴史を持つが、特に現代の英語圏における議論は、近代以降の科学的な自然探求の成功を受けて、論理的行動主義に始まる一連の物理主義的な主張の検討を中心として展開してきた。そのためこれまで、反物理主義的立場の持つ可能性は十分には議論されてこなかったように思われる。それゆえ、この立場の観点から今一度心身問題の様々な論点を検討しなおすことが、どちらの立場にとつても等しく必要とされているのではないだろうか。

以上の問題意識に基づき、本発表では、反物理主義の代表的論者であるT・ネーゲルの一連の考察を取り上げ、彼の議論の全体像を明らかにすることを試みた。ネーゲルの議論は、心身問題の議論において少なからず言及されてきたものの、多くの場合は簡単に触れられるにとどまっており、現状ではその主張内容の意義が十分に理解されているとは言いがたい。ネーゲルの議論が持つ構造と論争全体における位置づけを明らかにすることによって、反物理主義の立場からどのような議論が可能であるのかについての、大きな手がかりを得ることが出来るだろう。

具体的な議論の内容は、以下の通りである。まず、心身問題における物理主義とはどのような立場であるのかを説明した。物理主義は大きく還元主義と消去主義に分けることが出来るが、ネーゲルの批判は前者の還元主義に向けられたものである。還元主義とは、心的事象は確かに存在するものの物理的な仕方では説明可能である、という主張である。ネーゲルは、この主張に対して、そのような説明が不可能であることを説得的に示そうと試みている。その批判のエッセンスは次の通りである。すなわち、物理・科学的な説明とはそもそも心的事象を説明対象から除外することによって成り立っているため、この説明方法で心的事象を説明することは原理的に不可能なのである。

それでは、このようなネーゲルの議論は、反物理主義的な他の主張とどのような関係にあるのだろうか。反物理主義の代表的な議論として、「知識論法」(人間についてどれだけ物理的な説明を与えても、そこには説明されずに残る事実が存在する、ゆえに物理主義は誤りである、と言う主張)を挙げることが出来るが、ネーゲルの議論はこの主張の持つ欠点を乗り越えている。すなわち、知識論法が我々の知識獲得に関する事実を訴えているのに対して、ネーゲルの議論は物理主義の試みの原理的不可能性を示しているのである。

ネーゲルの議論の意義は、物理主義が抱って立つ最も大きな文脈を考慮した上でこの立場の評価を行っている点にある。今後の議論において物理主義者は、テクニカルで緻密な議論を必要とするパズル的な問題だけでなく、大局的見地における様々な論点間の整合性を維持するという課題にも同時に答えていく必要があることが明らかにになったと言える。

## 藤原惺窩の儒学思想

——「修己治人をめぐって」——

筑波大学大学院 廖 欽彬

藤原惺窩（一五六一—一六一九）は禪僧時代に中国儒学、とりわけ宋学を兼修するなか、天正十八年に朝鮮通信使と交際するのを契機に儒学を志向するようになり、ついに仏教界と訣別して独立し、儒学に専念しつつ生涯の幕を閉じた。

彼の思想は、自己の修養を他者との関わりにおいていかに実践するかという「修己治人」をめぐって展開された。そこで、本発表では、この「修己治人」に着目して惺窩の脱仏帰儒の経緯を検証し、彼の円熟した思想を表わす最晩年の著作である『大學要略』を中心に、彼の儒学思想の本質を究明しようと試みる。本論は以下の三段階から構成される。

第一に、惺窩の脱仏の経緯を行状と文集とを手掛かりに間接的に考察する。現世利益に溺れる五山僧と与するのを拒絶した行状の内容や「仏を好まず」と言明した惺窩の言説を検討し、彼の現世に強い関心を持ちつつ宋学の教養を深める傾向を浮き彫りにする。ついで、「古今医案序」に戦乱の世を安泰の世に取り戻すための打開策として「修己」の学を唱え出した惺窩の意図を明らかにし、さらに「戸氏家藏書跋」に惺窩が宋学の心の修養法としての「敬」に「修己」の学を求めたことを検証し、自己と他者との心の完全態を希求する

惺窩の「修己治人」の学を論証する。

第二に、惺窩の隠居生活に重点を置いて彼の「修己治人」の実践を検証する。まず、門弟の菅玄同の「続惺窩文集序」に惺窩の隠遁生活を志向しつつも、世間に強い関心を持ちつつ、儒教の理想境地つまり「修己治人」を実践に付したことを検討する。あわせて、仏教が人倫を無視することへの批判、換言すれば「自己成就」のみならず「他者成就」をも同時に重視する儒教の「修己治人」の学との関わりから惺窩の実践活動を具体的に示す。

第三に、『大學要略』において惺窩の「修己治人」の論理的展開を「体用論」に関連付けて論述する。まず、「大学の道」について、「体用論」をもって説明し、「明明徳」、「親民」、「止於至善」が「体用論」によって一事であることを主張する惺窩の意図を明白にする。ここから、惺窩における「明明徳」、「親民」、「止於至善」はそれぞれ「修己治人」と如何なる関係を持つているのかを検証し、体（止於至善）の実現による用（明明徳、親民）の成就、つまり「修己」の実践による「治人」の実現の論理を明らかにする。さらに、惺窩が一般人（学者）の体（止於至善）の実現のために唱えた心の修養法としての「格物致知論」を究明し、彼の「修己治人」の実践性を明白に示す。

## 平井金三と一八九三年万国宗教学大会

筑波大学大学院 野崎 晃市

平井金三は明治における仏教教育運動の先駆的な役割を果たしながらも、後にユニテリアンや松村介石の「道会」などへ加わった思想遷歴の故に日本の仏教研究においてほとんど注目されてこなかった。しかしシカゴ万国宗教学大会での平井の講演が海外の研究者より注目され、アメリカにおける仏教の紹介者として再評価が進んでいる。一八九三(明治二六)年にシカゴで開催されたコロンビア万国

博覧会では併設する世界会議として万国宗教学議が開かれた。この世界で最初に開かれた万国宗教学議は比較宗教学の成立と、それまでキリスト教中心であったアメリカにおける東洋宗教の導入の契機となったという意味において宗教史上画期的な位置を占めている。

日本からは神道の柴田禮一、仏教からは臨済宗の釈宗演と蘆津實全、真言宗の土宜法龍、浄土真宗本願寺派の八淵蟠龍、通訳として野口善四郎と野村洋三、キリスト教からは同志社の小崎弘道、ハーヴァード大学在学中の岸本能武太らが実際に参加し、前年よりアメリカで仏教伝道に携わっていた平井金三も仏教代表団と共に参加した。

万国宗教学議は一八九三(明治二六)年九月一日から開催され、平井金三は「一三四」に「The Real Position of Japanese toward Christianity」(「キリスト教に対する日本の真実の立場」という題で講演を行っ

た。平井のこの講演がシカゴ万国宗教学大会の一つの最高潮をなしたことは現代の宗教史研究においても森孝一、Secker, Stockman等の論文によって認められている。平井はこの講演の中で、キリスト教圏であるイギリスなどの西洋列強が人権や倫理を主張しながらも、その一方で日本に対して不平等条約を強要し非キリスト教国を植民地化している事実を挙げ、キリスト教の教義と行動の一貫性の無さとして批判した。

平井の万国宗教学大会における二つ目の講演は一八九三年九月二六日の「Synthetic Religion」(「総合宗教学論」という講演であった。「Synthetic Religion」において語られた平井の諸宗教の総合という思想は神智学の影響を受けたものであった。平井は日本における神智学の紹介者としても知られている。平井は一八八九(明治二二)年二月九日より同年五月二八日まで来日し仏教復興を訴えた「神智学協会」の創設者の一人ヘンリー・ステイール・オルコット大佐(Henry Steel Olcott 1832-1907)の招聘運動で中心的役割を果たした。「神智学協会」は一八七五年にヘレナ・ペトゥロウヴァ・ブラウアッキー夫人(Helene Petrova Blavatsky 1831-1891)とオルコット大佐が設立した宗教団体である。オルコット大佐は一八八〇(明治一〇)年よりイギリスの植民地地下にあったスリランカでキリスト教の圧迫を受けていた仏教の復興運動に携わっていた。

## 儒教と啓蒙とを結ぶもの

——ノエル訳『論語』を巡って——

琉球大学 井川 義次

中国明清期に來華したイエズス会士たちは、中国固有の哲学体系たる儒教に対する見解の相違から朱子の注釈を排斥する者と受容する者との二つに分かれていた。すなわちこれら相異なる二つの立場の対立は、朱子学の体系に現れる形而上学的存在と、それと関連する人間本性・道徳論をキリスト教的立場から認めるか否かということに起因していたのである。

今回取り上げた十八世紀のイエズス会士、フランソワ・ノエルは、同会の宣教師たちのなかでも、とりわけ朱子の見解を擁護する立場に立っていた。そのことは、彼に先立つイエズス会士たちが、儒家古典を翻訳するに際して、朱子の解釈を批判的に取り上げるか、あるいは極力言及しなかったのに対して、革命思想や性善説によってヨーロッパに物議をかもしかねない『孟子』を含む四書のラテン語全訳を、朱子の注解にもとづいて完成させたのがノエルであったことから理解される。

本発表ではノエルによる儒家の重要古典（『論語』『孟子』『大学』『中庸』『小学』『孝経』）の翻訳である『中華帝国の六古典』（一七一一）のうちから『論語』の訳文を検討し、彼の朱子学受容の実情について考察した。

ノエルは『論語』を訳出するに当たって、はじめに孔子の伝記と『論語』の理念に関して解説した朱子の「論語序説」を全訳している。このことからノエルがもはや前代のような朱子忌避の立場にはなく、むしろ一定の好意的評価をしていたことが明らかとなる。

事実、ノエル訳文は『論語』に関する朱子の理氣二元論にもとづく天人相関の思想をスコラの用語で西洋知性に理解しやすくトレースしていた。さらに理性の時代・啓蒙主義の興起という時代背景の影響によるものか、天与の人間本性ならびに諸徳の称揚、さらに徳性の涵養と実践に基づく自己と他者との人格の完成と、これを通じての理想世界の実現、為政者の率先垂範を条件とする国家統治の理念などが忌憚なく紹介されているのである。ノエルの翻訳はこれらの問題に関わる時は、朱子の合理的注釈を自由に援用しつつ、原文をこえて、はるかに詳細な解説を加えていた。このようにノエルは、朱子学のもつ合理性と人間性尊重の思想に触発されて、これを自己の見解に即して解釈的に翻訳し西歐世界に紹介したのである。

彼のこうした訳業は後に思わぬところに具体的な反響をもたらした。それは十八世紀啓蒙主義のリーダーであり、フリードリッヒ大王に思想的影響を与えたクリスチャン・ヴォルフが熱心に精読し、彼がハレ大学学長を退任する際の「中国の実践哲学に関する講演」（一七二二）の直接的資料としたことである。そこではヨーロッパが中国儒教に範を取って、人格陶冶と理想社会実現に努めるべきことが主張されているのである。本発表ではこのことについても関説した。

## 危機の神話か神話の危機か

——天武皇統神話をめぐって——

筑波大学 伊藤 益

記紀神話の中核をなすのは、天照大神もしくはタカミムスヒノ神の命を受けて、天孫ニギノミコトが地上界に天降つたと語る天孫降臨神話である。天孫降臨神話は、天武・持統朝のころにその骨格を整えたらしい。ところが、天武朝に出仕し、「歌俳優」として持統女帝に近侍した柿本人麻呂は、その代表作の一つ「草壁皇子挽歌」の長歌（?・一六七）において、前代の天皇天武を天上界から天降つた神として描く。これは、記紀の天孫降臨神話とその内容を異にするもので、人麻呂が独自にうたいあげた神話と見ざるをえない。しかし、神話を独自かつ個人的に語りいだすという態度は、種的共同体の共同主観として先所与的に確定されるという神話の本質に背馳する。満座の共感を美的な言辭によつてうたい上げる立場、すなわち「代表的感動」を歌詠をとおして表出する立場にあつた人麻呂が、こうした背馳という事態に対して無自覚であつたとは考えられない。人麻呂は、おそらく背馳の実態を的確に認識していた。にもかかわらず、彼があえて独自の神話を個人的に語りなければならなかつたのはなぜか。本発表はこの点に焦点を定めて、いわゆる人麻呂神話（天武皇統神話）の意味を探るものである。

持統初年のある日、人麻呂は越の國への旅の途次、かつて天智天

皇が都を置いた近江の地に立つた。人麻呂は、そこで、在りうべからざる事態に直面する。神統譜と同義であるところの皇統譜に連なり、それゆえに地上に姿を現わした神たる天皇天智の宮処が、繁茂する草に蔽われて廢墟と化していたのである。古代的思考によれば、神とその営みは不滅であるはずだった。ところが、人麻呂の眼前では、不滅であるべき神の宮処が跡形もなく潰え去ろうとしていた。人麻呂は、そのことのうち、皇統の危機を見た。おそらく、その危機を乗り越えようとしたのであろう。人麻呂は、「天皇の神の命」という同語反復的な呼称を天智に付与する。人麻呂がその庇護下に生きた持統天皇の治世は、血脈のうえで天智天皇のそれにつながる。神たるべき天智天皇の営みが滅び去つたことによつてもたらされる危機は、持統朝の危機でもあつた。人麻呂は、その危機から脱するために、前天皇天武を天上界からの降臨神として絶対化する神話を詠んだものと考えられる。とすれば、人麻呂神話とは、「危機の神話」、すなわち皇統の危機を超克するための神話であつたといえよう。人麻呂は、さらに、持統を神代の神として讃える吉野讚歌（一・三八（三九）や、草壁の息輕皇子を現し身の神とらえる安騎野の歌（一・四五（四八））などを詠む。それらは、彼が天武皇統の絶対化によつて危機の乗り越えを図つたことを示している。